

# 幼児の家庭，地域，および幼稚園生活における 自然とのふれ合いに関する研究

池山和子\*・島田俊秀\*\*

(1988年10月15日 受理)

A Study of the Natural environments and its correlations in life of an Infant

Kazuko IKEYAMA, Toshihide SHIMADA

## I はじめに—自然環境及び自然とのふれ合いのもつ意味

子供は歩けるようになると四肢や諸感覚器官を用いてまわりの環境に働きかけ，自分にとって未知のものを探索する。手でさわり，臭いを嗅ぎ，たたいて音を出し，口に入れる等の行動によって，そのものの性質を調査する。さらに，自分の力で統制できるかどうかを確認した上で，それを認識していく。このような一連の活動が，すなわち子供の「遊び」である。子供の遊び活動には，探索—調査—確認—認識といった過程が含まれている。この過程は，子供にとっては環境に働きかけ自ら社会化（成長・発達）していく学習活動である。子供のこの種の学習活動「遊び」は，他人からの命令や指示によって強制されたものではなく，ほめてもらうための活動でもない。子供が自分の内から発した内発的動機づけによって自発的・主体的に行う行動である。

子供は遊びを通して，次のような心身両面での発達を促進させる。(イ)身体的・運動的能力の発達を促進させる。(ロ)環境についての知識を広め，思考力，想像力，および創造力を発達させる。(ハ)自分や他人を知り，対人関係のマナーを学び，約束ごとを学び，協調すること協力することを学ぶ。(ニ)道徳性や自発性・自主性等の人格形成を促進させる。(ホ)情緒的な緊張や欲求不満を解消することを学ぶ。

最近，遊ばない，遊べない，遊びを知らない子供が増加している。心身共に健康な子供を育てるということは，活発に遊べる子供を育てることである。そのためには，子供が置かれている環境条件を検討し，遊び活動を活発にするための環境の調整を図らなければならない。

幼児を取りまく環境には，家庭環境，学校環境，および地域環境がある。これらいずれの環境も

\* 鹿児島大学教育学部家政科

\*\* 鹿児島大学教育学部心理学科

\*\*\*本研究は文部省指定鹿児島県教育委員会学校教育課による「幼稚園教育の在り方についての実践的調査研究」研究推進協力委員会（会長 島田俊秀）における研究の一部であり，ここに付記して各委員並びに研究協力園に対し厚く謝辞を申し上げます。

場、物、および人の3要因から構成されている。環境を構成している要因としての「場」というのは、生活空間を構成している各種の自然的条件・物理的条件・地理的条件、あるいは空間の位置方位、広狭などの諸条件である。これらの諸条件の中でも、特に現代の子供の遊びを妨げ、ひいては子供の円満な人格の育成を妨げているものは、自然的条件の欠落であると考えられる。

もともと子供たちが遊ぶということは、環境に働きかけ、そこから生じる刺激を求めるためである。そのためには環境は子供たちの働きかけに対して応答するような不確実性の要素を含んだ可変的な環境でなければならない。ところが現代は、経済的な繁栄の名のもとに、自然破壊が進められてきた。子供たちの近辺からは、緑の草や木も、小鳥や小動物も失われ、大都会では高層ビルや大気汚染によって太陽も月や星を見ることさえもできない。また高度に発達した文明化・機械化した生活の中では、とりわけ大都会の子供たちは、外出や通園でもバスや自家用車を用い、四肢を動かせる機会は少なくなり、子供自らの筋肉を鍛練する機会を失いかけている。

自然が破壊され人工化、合理化、規格化された環境では、子供たちの遊びは失われ、身体は軟弱になるばかりか、心は機械のようにひからび、美しいもの、善なるものに対して何ら感動することも愛することもできない、いわば美的情操も倫理的情操も失ってしまうおそれがある。

現代のこのような状況下で鹿児島県は現在文部省の委託を受け、自然とのふれ合いを中心とした望ましい幼稚園教育の在り方についての実践的調査研究を行っている。その基礎資料として鹿児島県の子供の自然との関わりに関する実態調査を行った。

今回は記入者つまり保護者の幼少のころと現在の子供たちを比較しながら、現在の子供たちの自然とのふれ合いの様子、さらに性差、年齢による傾向について考察する。

## II 調査の方法

### (1) 調査の時期と調査用紙の配布の方法

1987年(昭和62年)10月から11月にかけて各園を通じて配布、回収した。

### (2) 調査対象児

対象児は、文部省の委託を受けて鹿児島県が実施している「幼稚園教育の在り方についての実践的調査研究」の研究協力幼稚園3園の各園園児の保護者、全園児数は356名である。

回収率100% (356名)

調査対象児の年齢別構成比や男女別対象児数、居住環境別対象児数等は〔図1〕から〔図4〕のとおりである。〔図3〕の年齢別対象児数については、満年齢3歳児は3名と数が少なかったため、分析から省いた。

### (3) 質問項目

幼児と自然とのふれ合いの実態についてできるだけ多くの角度から、生活実感に近い回答が得られるよう14問の質問を設け、できるだけ選択肢を設けるよう努めた。(巻末参考資料を参照されたい)

図1 記入者別対象児数と構成比

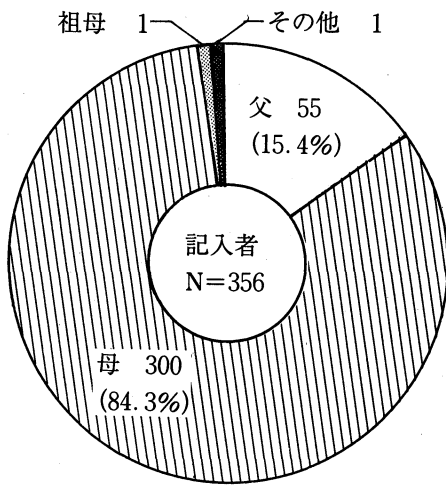


図2 男女別対象児数と構成比

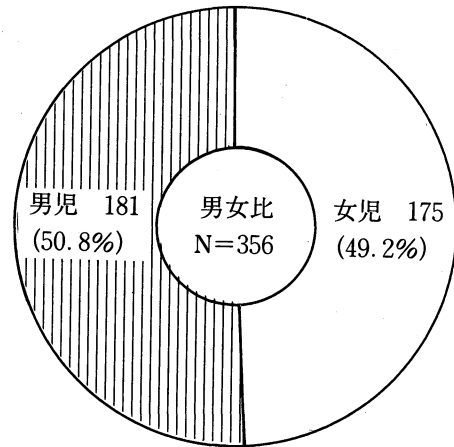


図3 年齢別対象児数と構成比

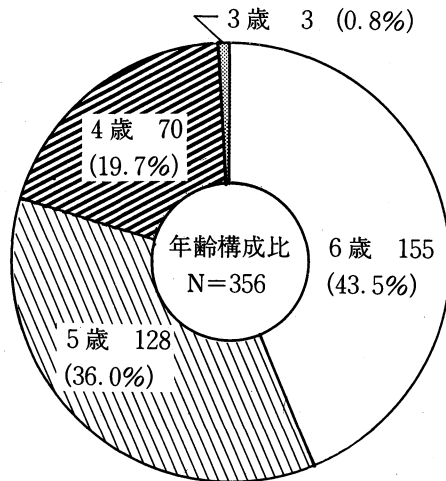
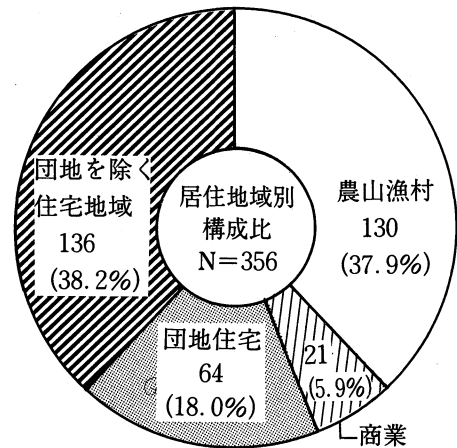


図4 居住地域別対象児数と構成比



本報告では質問(1)から質問(13)までの結果について考察する。

質問(1)・(3)・(4)……遊びの場所に関する質問。質問(4)は具体的な場所をいくつか挙げ、各々について「よくある」、「時々ある」、「殆どない」の3段階評定によって回答を求めた。

質問(5)・(6)・(7)・(12)は、自然と直接ふれ合う遊びや体験の有無、頻度に関する質問で、それぞれ具体的な遊びや行動・体験を挙げ、質問(4)と同じく3段階評定によって回答を求めた。

質問(8)……天文、植物、物理現象など自然の事象を挙げ、大人に質問したり、話合ったりした経験の頻度についての質問で、質問(4)とやはり同じく3段階評定によって回答を求めた。

質問(9)・(10)・(11)は、各家庭で生き物・植物を飼育、栽培したことがあるかどうか、さらに具体的な飼育、栽培のかたちについて質問した。

質問(1)~(7)には記入者の幼少のころについて、現在の子供に対する問いと同じ問いの回答を求めた。

### Ⅲ 調査の結果〔1〕

#### (1) 現在の子供たちの様子—記入者の幼少のころと比較して—

##### ① 遊びの場所

まず〔表1〕にみられるように、現在の子供たちで戸外遊びを室内遊びより好む子供は四割をこえているが、戸外遊び、室内遊び、どちらも同じくらい好きの3項目で記入者の幼少のころと比較すると、戸外遊びへの指向は記入者の時代と比べて減少している。

〔表2〕はいつも遊んでいる場所を3つ選択して回答を求めた。その結果、現在の子供たちは自分の家の庭、友達の家、道路、グラウンド・公園などの整地された土地で遊んでいることが記入者の幼少のころと比べて多く、それに対して、記入者の幼少のころは現在の子供たちと比べて神社やお寺、田畑、川、野原など整地されていない土地で遊ぶことが明らかに多かった。

〔表3〕は具体的な場所を挙げ、それぞれの場所について遊びの頻度について回答を求めたものである。

現在の子供たちが記入者の幼少のころと比べて明らかによく遊んでいると思われる場所としては、アスレチック・ブランコなどのある遊園地、砂場、花壇などのある整備された場所、動物園を挙げることができる。一方、記入者の幼少のころの方がよく遊んでいたと思われる場所としては、広い芝生や草地、木や草の多い整備されていない場所、川原・小川・田・小さな池など、海岸、土手・崖、牛・にわとりなどの家畜のいるところ、小人数でゲームなどのできる空き地、さらに山林・森などのスリルのあるところを挙げることができる。

##### ② 戸外で一緒に遊ぶ人

〔表4〕にみられるように、現在の子供たちにおいても約半数が同年齢の友達と戸外で遊ぶこと

表1 戸外遊びと室内遊びどちらが好きか

	現在の子供	記入者の幼少時
ア 室内遊び	30(10.1%)	24(8.1%)
イ 戸外遊び	131(44.0%)	183(61.4%)
ウ 同じ	136(45.6%)	83(27.9%)
エ わからない	—	3(1.0%)
オ 遊ばない	—	5(1.7%)
無回答	1(0.3%)	—

ア・イ・ウの3項目で $\chi^2=21.719$   $P<0.01$

表2 戸外でいつも遊ぶ場所—現在の子供と記入者の幼少のころ

	現在の子供	記入者の幼少時	
ア 自分の家の庭	249(83.6%)	210(70.5%)	** $\chi^2=13.922$
イ 友達の家	216(72.5%)	182(61.1%)	** $\chi^2=8.141$
ウ 道路	96(32.2%)	71(23.8%)	* $\chi^2=4.896$
エ 神社やお寺	10(3.4%)	30(10.1%)	** $\chi^2=10.963$
オ 田畑	39(13.1%)	79(26.5%)	** $\chi^2=17.538$
カ 川	10(3.4%)	46(15.4%)	** $\chi^2=26.025$
キ 海	10(3.4%)	16(5.4%)	
ク 山	2(0.7%)	38(12.8%)	
ケ 整地された土地	165(55.4%)	57(19.1%)	** $\chi^2=83.238$
コ 整地されていない土地	52(17.4%)	129(43.3%)	** $\chi^2=48.743$

(\* $P<0.05$  \*\* $P<0.01$ ) (各  $df=2$ )

表3 戸外でよく遊ぶ場所遊ばない場所

	現 在 の 子 供			記入者の幼少のころ			
	◎よくある	○時々ある	△殆どない	◎よくある	○時々ある	△殆どない	
ア アスレチック・ブランコなどのある遊園地	64 (21.5%)	192 (64.6%)	41 (13.8%)	19 (6.5%)	84 (28.7%)	190 (64.8%)	** $\chi^2=162.840$
イ ジェットコースター・ティーカップなどのある遊園地	7 (2.4%)	179 (60.5%)	110 (37.2%)	2 (0.7%)	65 (22.1%)	227 (77.2%)	
ウ 砂 場	174 (58.6%)	99 (33.3%)	24 (8.1%)	94 (32.0%)	142 (48.3%)	58 (19.7%)	** $\chi^2=46.098$
エ 広い芝生や草地	73 (24.6%)	165 (55.6%)	59 (19.9%)	112 (38.4%)	130 (44.5%)	50 (17.1%)	** $\chi^2=13.547$
オ 花だんなどのある整備された場所	22 (7.4%)	143 (48.1%)	132 (44.4%)	9 (3.1%)	104 (35.6%)	179 (61.3%)	** $\chi^2=19.437$
カ 動物園	12 (4.0%)	209 (70.4%)	76 (25.6%)	8 (2.7%)	100 (34.2%)	184 (63.0%)	** $\chi^2=84.227$
キ 木や草の多い整備されていない場所	39 (13.1%)	108 (36.4%)	150 (50.3%)	149 (50.5%)	93 (31.5%)	53 (18.0%)	** $\chi^2=111.296$
ク 山林・森などスリルのあるところ	4 (1.3%)	58 (19.5%)	235 (79.1%)	86 (29.5%)	104 (35.6%)	102 (34.9%)	
ケ 川原・小川・田・小さな池など	18 (6.1%)	112 (37.7%)	167 (56.2%)	119 (40.8%)	116 (39.7%)	57 (19.5%)	** $\chi^2=128.402$
コ 海 岸	17 (5.8%)	179 (60.9%)	98 (33.3%)	39 (13.4%)	105 (36.0%)	148 (50.7%)	** $\chi^2=38.676$
サ 土手・がけ	7 (2.4%)	54 (18.2%)	235 (79.4%)	55 (18.8%)	117 (40.1%)	120 (41.1%)	** $\chi^2=98.196$
シ 牛・にわとり・など家畜のいるところ	27 (9.1%)	79 (26.7%)	190 (64.2%)	81 (27.6%)	105 (35.7%)	108 (36.7%)	** $\chi^2=53.690$
ス 建築・工事現場の近く	3 (1.0%)	29 (9.8%)	264 (89.2%)	4 (1.4%)	37 (12.7%)	251 (86.0%)	
セ 少数でゲームなどのできるちょっとしたあき地	66 (22.4%)	131 (44.6%)	97 (33.0%)	128 (43.8%)	112 (38.4%)	52 (17.8%)	** $\chi^2=34.574$

(\*\* P<0.01)

が多いと答えているが、記入者の幼少のころと比べると、きょうだいと遊ぶ割合が増え、同年齢の友達と遊ぶ率、特に異年齢の友達と遊ぶことが減っている。

③ 自然と直接ふれ合う遊びや体験

現在の子供たちは、記入者の幼少のころと比べ、小石、貝がら、木の実・花などを集めたり、付近にある自然のものを取り入れてのごっこ遊びや自然のものを利用した伝承遊び、木のぼりや草の上を転がったり、土手すべりをしたりす

表4 戸外で一緒に遊ぶ人

	現在の子供	記入者の幼少時
ア 一人	5(1.7%)	2(0.7%)
イ 親や大人	12(4.0%)	5(1.7%)
ウ きょうだい	96(32.2%)	49(16.4%)
エ 同年齢の友達	153(51.3%)	167(56.0%)
オ 異年齢の友達	31(10.4%)	69(23.2%)
無回答	1(0.3%)	6(2.0%)

ウ・エ・オの3項目で  $\chi^2=29.945$  P<0.01

るなど自然物を使って身体を動かす遊び、凧を揚げたり、かざぐるまを回したりして工作物を使って遊ぶ遊びが減っている。〔表5〕

顕著な傾向とは言えないが、かぶと虫などの地中の虫を掘り出すことは現在の子供がやや多いようである。

表5 自然とふれ合う遊び

	現在の子供			記入者の幼少のころ			
	◎よくある	○時々ある	△殆どない	◎よくある	○時々ある	△殆どない	
ア 泥・土いじり, 砂遊び	236 (79.2%)	61 (20.5%)	1 (0.3%)	212 (72.1%)	77 (26.2%)	5 (1.7%)	
イ 水でっぼう・しゃぼん玉・色水作りなどの水遊び	120 (40.4%)	165 (55.6%)	12 (4.0%)	138 (46.6%)	148 (50.0%)	10 (3.4%)	
ウ カブト虫など地中の虫を掘り出す	50 (16.9%)	116 (39.2%)	130 (43.9%)	35 (11.8%)	101 (34.1%)	160 (54.1%)	
エ 小石, 貝がら, 木の実・花などを集める	95 (31.9%)	164 (55.0%)	39 (13.1%)	150 (51.0%)	124 (42.2%)	20 (6.8%)	** $\chi^2=23.720$
オ 付近にある自然のものを取り入れたのごっこ遊びや自然のものを利用した伝承遊び(笹舟作りなど)	35 (11.8%)	143 (48.3%)	118 (39.9%)	163 (55.3%)	112 (38.0%)	20 (6.8%)	** $\chi^2=156.615$
カ 木のぼりや草の上を転がったり土手すべりをしたりするなど自然物を使って体を動かす遊び	37 (12.5%)	137 (46.4%)	121 (41.0%)	170 (57.6%)	97 (32.9%)	28 (9.5%)	** $\chi^2=149.860$
キ ありの行列など生き物の動きをじっと見る	70 (23.5%)	177 (59.4%)	51 (17.1%)	68 (23.2%)	181 (61.8%)	44 (15.0%)	
ク たこをあげたり, かざぐるまを回したりしてして工作物を使って遊ぶ	29 (9.8%)	172 (58.1%)	95 (32.1%)	90 (30.7%)	154 (52.6%)	49 (16.7%)	** $\chi^2=47.120$

(\*\* P&lt;0.01)

〔表6〕は野生の生き物を子供が自分でどのくらい捕まえているものか調べたものである。とんぼ, せみ, ちょう, かみきり, みみず, おたまじゃくし, かたつむり, くも, ふな, めだかなどを自分で捕まえることは明らかに記入者の幼少のころが多い。また, かえる, どじょう, すずめも記入者の幼少のころに比べ, 現在の子供たちは自分で捕まえることが減っていると思われる。一方現在の子供たちの方が記入者の幼少のころに比べて多いのは, だんご虫であるが, 他にかぶと虫, くわがたもよく捕まえているといえよう。

〔表7〕は自然とふれ合う様々な行動を挙げたものであるが, はだして庭や外を歩いたこと, 雨降りにかさもささずに外で遊んだこと, 川や池で石を投げたこと, 高いへいや崖を歩いたこと, 犬や猫を追い回したこと, 花壇や畑の中にはいって荒らしたこと, おとなの使う道具を持ち出して何か作ったこと, 自分でとってきた種や苗を植えたこと, きいちごなどの野生の木の实や野草を自分でとって食べたこと, また森や洞窟を探検したことなど, 記入者の幼少のころに比べて現在の子供たちは経験が少なくなっていると思われる。

現在の子供で記入者の幼少のころと比べて多いのは, すり傷やこぶをこしらえたことである。これまでみてきたように, 現在の子供たちは自然とのふれあいが減ってきている傾向がみられるが,

